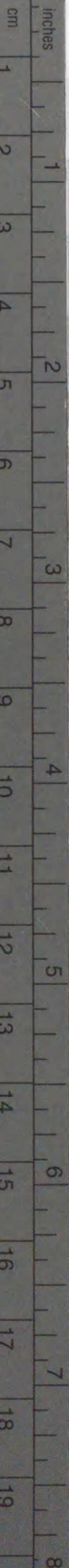


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



914.42
i

異本方丈記

完



其本方丈記

此の異本方丈記はもと
 森洽藏氏の有ふ一冊に
 東京帝國大學の所藏に
 係るものあり別に本文
 の右側ふ添へたるは同
 大學文科大學國語研究
 室の藏本と比較して其
 の異る所を指示したるも
 のふり一字下げたり。記
 したる所も亦然り。



245177

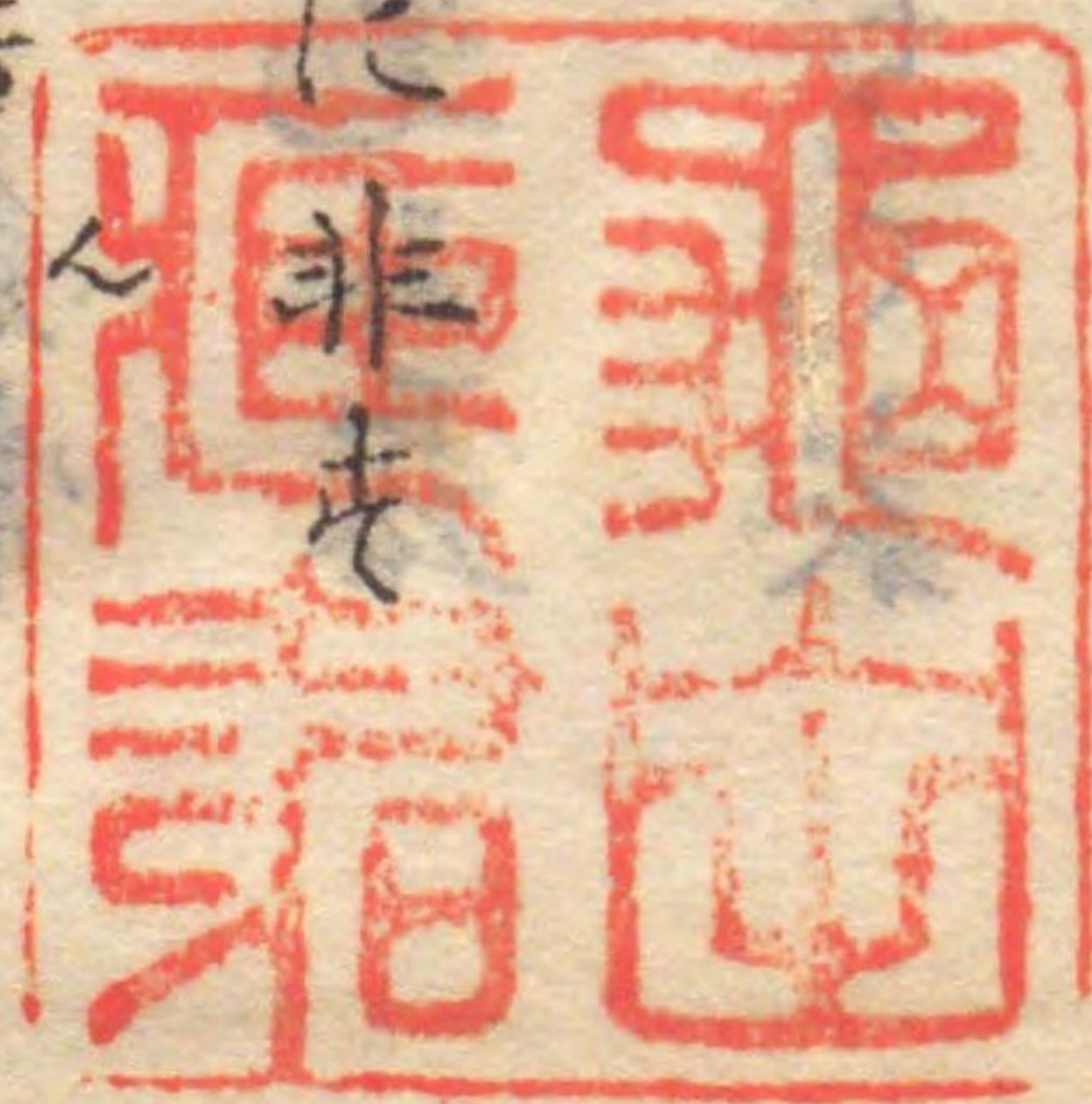


大に流す水然り。一
 の水。一。半。下。ヤ。ア。晴
 の。集。る。所。も。示。し。六。と。上
 室。の。集。る。所。も。示。し。六。と。上
 大。學。文。林。大。學。附。録。其
 の。水。陰。の。水。一。六。と。上
 神。と。小。の。水。一。六。と。上
 東。京。帝。國。大。學。の。附。録。其
 森。の。水。陰。の。水。一。六。と。上
 此。の。水。陰。の。水。一。六。と。上



異本方丈記

行河の流は絶えきして去かもとの水に非
 たりとみ子浮ぶるたかとはあつ消えかつ結ひて



久しくとらぬ事なし世間のある人の住家も

亦かくの如しもの。里々にむねを形うへ薨

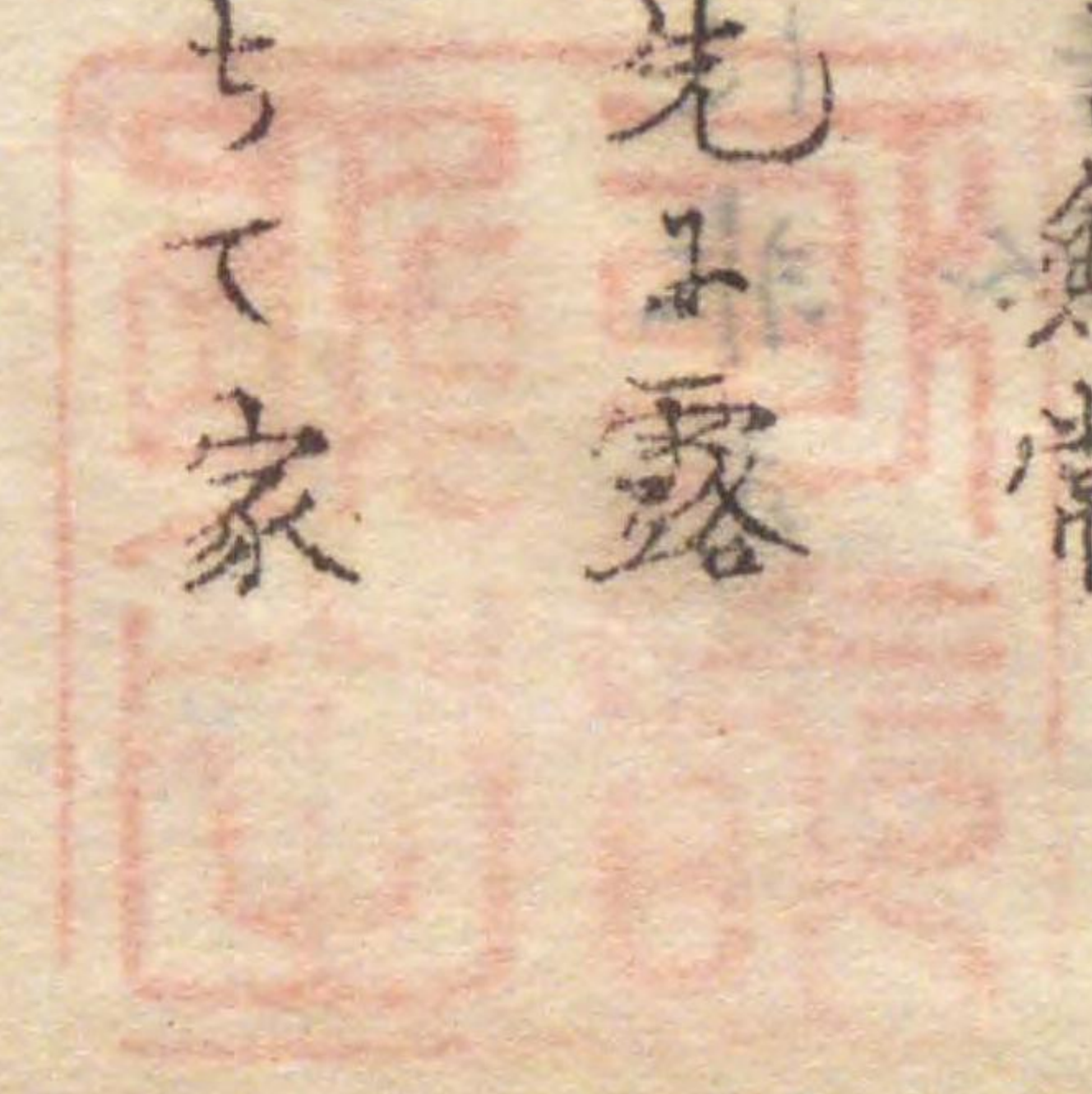
を争へる貴た賤たき人の住居は世々を盛たて

盡せぬものなれとも昔ある人りは今はなし或は

去年榮はてことし亡ひ或は昨日作りて今日は



焼けぬ住既+む人是子同じ姿も替らぬ振舞も同じ
 を北とも古見し人は百人の中子僅僅+ふ一人二人
 残り或は詞を交へ契り結ひし人も浅茅か
 原の露と消え或は名を聞き姿を見し人も蓬か
 もとのちりと成り又朝子生北夕子死するな
 ひ唯水の上のうたかたあり其主と住家と無常
 を争ふきは種の露不同し或時は花より先子露
 ころ北或時は露より先子花凋む主先立ちて家
かの如く或は



は あるいは家は失して主のり主とせしかと共子
 残るもあり主より先子亡ふる家もありといへ
 ともう北へならぬ時は稀あり若き子を先立て
 袖を絞る老人もあり親に後北て路頭子さゆら
 ぶ孤契或はを結ひ夫妻も別れて比目翼目のかたりひ空
ち或は志く頼哉かくる主君を失いて眷願願の思あらた
す又また友も相向へる時子はこれかれとははく養もとほあひのを心を費せ貪し
 き者力財あらむ事を望み富める者は財宝の失は
 る事を嘆くといへとも心子叶ふとなし此故子

あるふつけても憂へなきよはけても憂へまど
いふ事なも又僅まこ北かなへんかき缺くるま
を嘆き彼是同じくある事を思へとも思ふた從
ふことなしかやうま歎きうう一生は盡くると
いへども希望は盡ふにけらうこれらの事を思ふに
家あれは焼失の恐あり妻子あれはいくまむ
思あり眷属あれは心小從はさる怨あり寶あれは
盗人の憚あり田畑はまけ公よつり危みあり

たごのれをたごのれとまごのれとまごのれとまごのれと

まへて高き人よは從はむとまごのれひ下れる人をけ
從へむと勵む允安き所なしいつくおか此身を
宿さむいふ況んや只此世はうりの苦ありて
後の世の恐なくはさてもありなむ傳へ聞くる
一日一夜成ふるよ八億四千の念思あり其念々の
内ふおす所皆三途の業といへりかの三途小趣
きかおんよは久しきまは只一の息二つの眼閉
るを待つもうあり以下十五行ナシあらお使お追はれ闇ま道

不向む時眼不遮るものは牛頭馬頭の怒る姿
耳不聞ゆるものは炎魔法皇の氣色詞姿闇浮不
ありし時諸教の流布ハ見きや見きりきや知識
の教をけ聞やきあさうきやもし聞きあある信
ぢりして爰不來れるものなうけ誰を託ち何も
のを恨む成劫のそのあみより汝いくたひか
我らか手よあうりて苦きうけし吾はくたぶ不
汝不又來るなとあつらへしうらから苦の種成

植ゑて苦れき所は來る事憂の中の愁あり夏の
虫此火不入りてくゆるあとし尤愚ありと人皆
是を知らしむやも朝の露のかゝれるほとを
うらみ野原の風の絶えきる間をほらう此世此
苦しきことを望みて後の世の恐ろしき態を營
むあへし爰不我深文谷の邊不閑ある林の間不
僅は方丈ある草の庵を結へり竹の柱を立て刈
萱を葺き松葉を圍とし古木の皮をしよもの

せり傍よ笈の水を湛へたり東南の角すま五尺ふの
葦の竹あしを敷きて夜の床としさゆる霜の夜小
身を温む西南の角ま窓をあけて竹の編戸を立
てたり西の山の端をほまほるまたりあり西南北
の角五尺ふの竹の簀子きを志き阿弥陀の繪像
を安置さりすはす。棚をあらく往生要集如まの
文書を少なむおけり

又またはりして琴琵琶をたて置けりはゆる
折琴つき琵琶是あり今まらの身みのおふせ

ぬ手すきひあめりも昔忘れぬ名らりし折ふ
しはあきあるおもひきやり子期か知きの
知音も物さねと興あれの志く松のひき
秋風の樂をたくへ岩をわけ流り水を流
泉の曲をあやとる藝のこれつたおけれ人
の聞をよるこはしめむとあらす獨志り
へひくり詠してみつら心をやらふ計ふ

此庵を作る小巧匠を雇はされとも自ら結ぶに
たてたり又心の移る小任せて心さしあら人と
すれとも新しき益もあら程小しといへとも一
身をやとり狭うらたたとい是く廣く

誰をか宿し何者をも置かむ澤の根芥をつみ峯

木のきの草刈はみ葉を拾ひあはれはけりて用ひ麻の衣

藤の衣得るよ従ひて肌を隠す何ふうちよ惜し

お命ありねら糧の盡ぶお愁を思はず人ふ交

る身ならねら姿を恥す悔もふし報ふへき力お

けれは人の恩も願はしふら名聞を思はずれ

ハ誇る人の恨めしおのつらく若なれへきこととあれ

は即ち己おれか身を使ふ物憂しあはれあはれあはれ

おはちか

ねと馬鞍牛車と心を悩まらる安し今一身を分

ちて此用をおて手の奴足の衆物是我心不叶へ

り苦しき時ハ休め時々は使ふ使ふとてこも病も痛は

しうら申物しとて事さめいもかきうけ況や世の常の

振舞あらねは何故おかし事さめいもいとなき身き苦

めむ只常もは世のはあふよを朝の露の消え

やまふふ誓へ身の定ふき事を夕の雲おとめ

難きふおして有るうけ無きふつ々阿あ

ちよちよ誦誦ひ求求むる業業おし志志す道道深深けれははれ
 なる愁愁もふし谷谷の清清水水峯峯の木木立立眼眼をとりこは
 しむる友友也也風風の聲音虫虫の音声耳耳に從上ふ力力之之春春は鶯
待てばの聲聲をを鸚鸚鵒鵒の啼啼きと聞聞く松や藤や紫雲のよきはひまおつたし
 ふとふ四四手手の山山路路を契契る秋秋は隈隈ふ月月の影影ふ
 満満月月の顔顔はささ戎戎思思ひやり冬冬の嵐嵐ふ散はのふ紅葉
 きふ常常ふりぬ世世のふめしあくと見見殊殊きらふ無
 言言戎戎ささきれともひき獨獨居居は口口業業をもつくる事事おしかき禁

戒戒を守守ららきれとも境境畏畏ふけれは何何ふははけてか
 やふらん若若馨馨しき友友の柴柴の戸戸を叩叩いて來入入入ら
 往往事事をのたらひ來來縁縁を契契るそれ世世世間間利利養養の
 為為ふ契契らら唯後唯世菩提菩提の真真の善善知知識識の為為ふ語語らふ
 心心ふ佛佛を念念し手手ふ經經卷卷を握握るふ妨妨くる人人もふ
 小小倦倦たれは自自ら休休むおおのつつから念念るふ恥恥つへ
 き人人もふし心心勇勇めは又又勤勤む念念佛佛何何遍遍と定定めす
 經經卷卷何何卷卷と定定めし名名聞聞の為為ふさききれの人人ををふ

ざる事ふし檀那をいのらきまめあふしのおき
 事をも恨みま但慚愧のつから讃毀心起を發し信敬教の
 思ひおならん事を待つはありなり方丈の居すまゐ呀
 ぶのき事かくのかや富の事又人ふ向ひ
 ていふふい非いす只身いふいて心の行く方おれ
 は原憲つの百綴つ顔子つの一粒粒の跡を思ふはかりお
 り若人十これを疑はいく思はい魚と鳥との情を
 見よ魚い水いふあいうい鳥は林いふ飽愛のい魚い非いさ

此の水の住いまき事を知らいま鳥い非いさ此の林
 の願いはいまいを知らいすいれいかい如いくい富いえいるい人いのい賤
 一い振い舞いをい苦いと見い貪い人いもい富いをい苦いと見い志
 一いおいらいぬいのい振い舞いもい同い一いからいすい今い方い丈いのい牝い庵いよ
 く我い心いふい叶いへいりいかいるいかいゆいえいるい萬い物いをい豊いふい志いて
 りいれいはいしいきい事いないしいいいかいふいはいんいやい一い生い夢いのい如
 ちいふいはいきい過いきいてい迎いのい雲いをい待いちいえいてい菩い薩い聖い衆いふ
 肩いをいあいりいへい不い退いのい淨い刹いふい詣いついてい如い來いのい要い藏い

破^{いらい}て功德の正財豊^聖ふして世々生々の父母師
長をたすけ六道四^生聖の群類^生を引導^{みちひかむ}せ人事^{かむ}以く
はくのみ^{はく}の^{のみ}一^の一^の抄^の抄^のや

(國語研究室本)
黒塗の衣不似たる心かとう人あらは
い^いか^かこと^{こと}た^たへ^へむ^む 桑門蓮風誌之

寫本者

長享二年戊申十二月十三日於宇多橋西本
願院找老眼雖為寒中秃筆手龜鳥跡永堅依
為大切寫之者也 佛子奠源

又次云

干時天文八年己亥正月廿五日於柁尾安樂
院南窓書之 隆忱

又次云

右之本喜多院源春坊隆堅得也寫是之人々
五字一類之御廻向奉憑者也

慶長二十年葉月下旬 寶生院信盛書

(國語研究室本與書)

方丈記者是祇翁之所持以長明自筆卷物寫
之畢誠筐中之重寶也
延徳二年三月上旬 肖柏判

英德二年三月上旬
畢鴻道中之重寶也
長子文信皆長海錄之
所封以身期自筆卷
（同錄形突本與書）

寶子二十一年業月十日 寶子院計數書

五字一號之海歐向奉感者也
或之本喜多宛然春林
金蓮得也真其之人

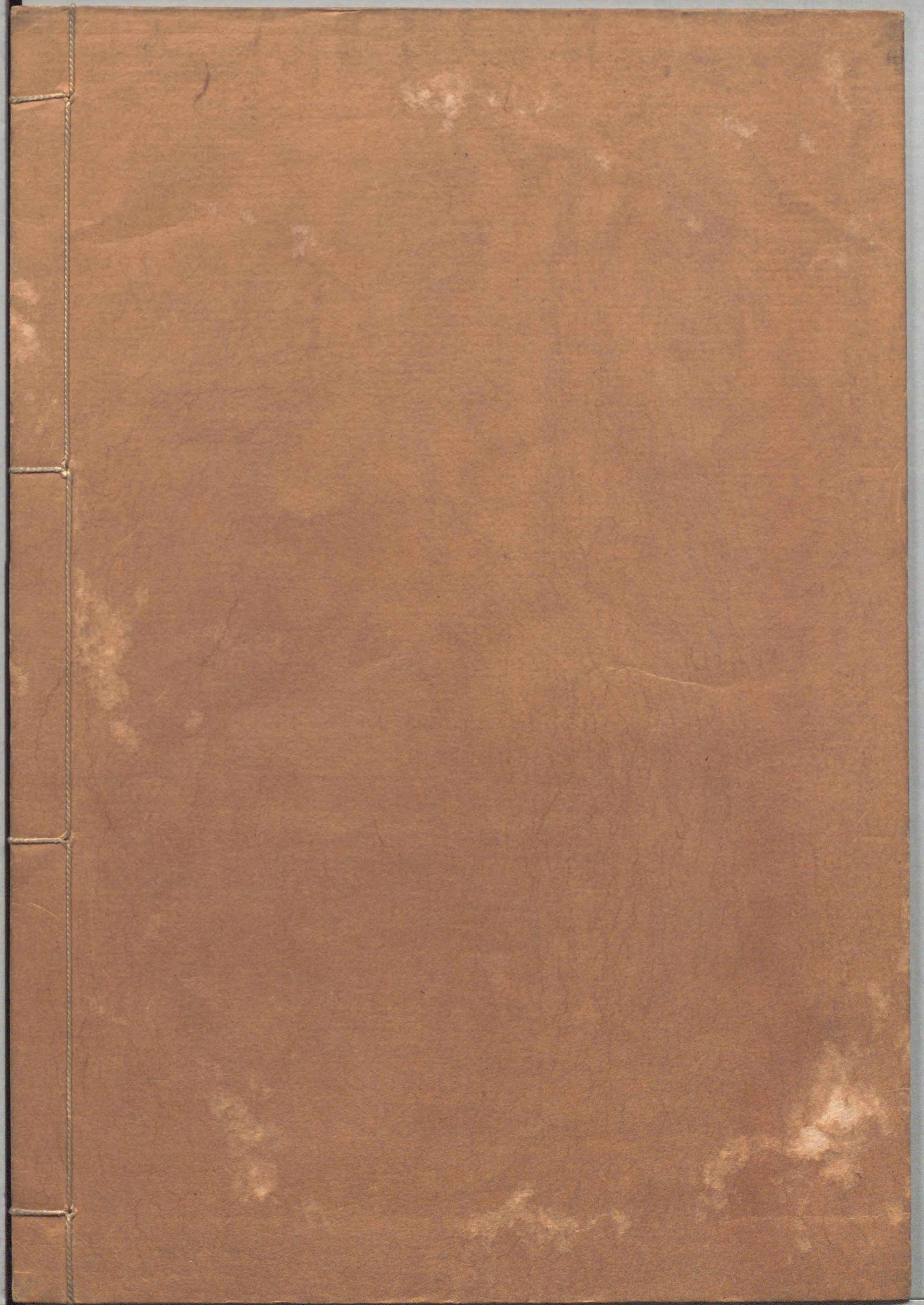
寫文卷之

南南宮主與年 十一月十日 於南宮

平批夫文八筆已亥五月五日 於南宮

為文如卷之者也





914.42

i



00245177



龜田文庫

